

9月 ちとせだより

いじめを苦にして自殺した中学生の問題は、学校や教育委員会の対応に問題はなかったかどうかを調査するために警察の強制捜査ということになりました。また、同級生や目撃した生徒からの任意の事情聴取も行われていると報道されました。事実関係が究明され、今後このようなことが繰り返されないようになることが望まれるわけですが、私自身が課題と感じるのは、子どもたちの中にいじめといった行動から逃げる力が、さらには目撃した友だちにもいじめを止める力が育っていないのではないかということです。もちろん、いじめはどの学校でも起こりえるということ、すべての教職員が認識し、問題に対して学校として組織的に対応できるように、早期発見・早期対応が大切であることは事実ですが、子ども自身に目を向けると、いじめをする子ども、いじめから逃れられない子ども、周りでそれを気づいた子どもがそこにいるわけです。そしてそこでの行動は、それぞれの子どもの自身の成長の過程としてあるわけです。

自らの安全を確保する第一義的責任は本人にあるわけですが、もちろんその子どもの年齢により、大人の関わりの程度は変わります。乳児であれば、そのすべてを守られなければならない存在でしょうし、幼児であれば、言葉で訴えることが出来ない時期の子どもは手が出たりもしますが、徐々に言葉で相手に嫌だということも伝えられるようになり、また困った時、分からない時には、声を出して手伝ってもらったり、助けてもらったりすることも出来るようになることが必要です。小さいころから子ども同士の間を親や教師が管理し、介入することばかりを繰り返した結果、子ども自身が自分たちで問題を解決出来なくなっている状況は、子育てや教育の現場にとって無視できないことです。

幼稚園では子どもたち、また保護者の方々を対象に「子どもの暴力防止プログラム」のワークショップを毎年開催しています。そこでは、子どもたちの中に「自分は大切な人」という人権意識を育むことが暴力防止の大きな力となることが語られます。そして、子ども自身が実践できる暴力防止の方法として、「嫌だと言う」「その場を立ち去る、逃げる」「誰かに相談する」といった行動をとることが大切であることが伝えられ、その声の出し方なども経験するのです。

自分の気持ちを表現し伝えること、困った時は信頼できる人に相談すること、また友だち同士で助け合うことが出来る人間として成長することは、幼児期からの豊かな人間関係を経験し、人間そのものに対する基本的な信頼感と愛情を持っているからこそ出来ることです。そのためには、子ども同士の自由な関係が重要で、喧嘩をした時に自分はどんな気持ちだったのか、相手はどんな気持ちだったのだろうかを感じ、自分の気持ちと同時に他者の気持ちも理解できるようになることが大切です。

「みんながしていたから、自分もしてしまった」「誰もしていなかったから、しなかった」といった主体性のない人間になるのではなく、また自分には関係ないではなく、赦せないこと、見逃せないことに対しては、自らの心と力を信じて、毅然と行動することが出来る人間として、子どもたちが成長することを願っています。

年主題 「あふれる愛 小さなものとともに」

9月主題 「いっしょに」

聖句 “フィリポは、「来て、見なさい」と言った。”

(ヨハネによる福音書1章:46節)